静和幼だより

- 夏の研修報告
- おやこんぼ通信
- 教員養成校訪問/小田原短期大学
- 子育てフェア（駿豆/遠州）
- 特集『親と子の心を育てる幼児教育』（その3）肥後功一
- コミュニティ（保育の窓）
- 絵本の紹介/福音館
- もの想い（鈴川幼稚園/富士見幼稚園）
- 街ぶらり/伊豆地区
- 健康随想/子育てカウンセラー 山本奈苗

こどもがまんなかPROJECT
只今全国展開中

NO.172
2014⑫
Winter

研修受講生のレポート

夏の研修報告

学校評価研修会

7月29日グランシップにおいて保育の質の向上を目指した学校評価研修会が行われました。初めに学校評価を今までどのように取り組んできたのかのお話を聞きグループで自園の様子を話し合い、最後にこれからどのように取り組んでいくかを学びました。

幼稚園は文部科学省が定める学校教育機関で公共性があり、助成金を受け取ることができるため、学校評価を実施することが求められています。私立幼稚園はどの子どもが通っても望ましい保育が求められます。どこの園も同じ内容、レベルを合わせる公立とは違い、自園の独自性や良さを残しながら、地域に納得できる幼稚園にしていきます。そのため、学校評価を行い、保育の質を向上していくことが大切になります。

学校評価とは自己評価、学校関係者評価、第三者評価の三つが揃って学校評価となります。自己評価では職員が園全体として教員の質をあげるために行うもので、各自だけで自己評価を行うと評価のレベルの違いが出てしまうため、自己評価をした後、グループで話し合い、今年の反省と次年度の目標を決めるようにすると自己評価が効果的になります。学校関係者評価では、地域の方や保護者に理解していただき、意見をいただくことが大切になります。今現在、自己評価は効果的に行えているが、学校関係者評価と第三者評価が難しいとグループ討議で話し合いました。学校関係者評価ではまず、アンケートなどで意見を聞く前に、園の教育方針や実際の子どもの様子を知っていただくことがいい改善策となります。

学校評価では組織的、継続的に教育の改善を目的とし、保護者や地域社会からの理解をしていただき、信頼される幼稚園を作るために必要となります。

今回は学校評価の大切さ、必要さを学びました。保育の質を向上できるよう学校評価をもう一度見直し、取り組んでいきたいと思いました。

2年目教員研修

平成26年8月1日、静岡市のもくせい会館において2年目教員研修会が開催されました。当日は180名の参加があり、その中には数人の男性教員の姿も見受けられました。

午前中の講義Ⅰでは、文京学院大学特任教授の平山許江先生から「教師の援助で大切なこと」というテーマのもと、講師という立場でご教授くださる一方、自分の失敗談も交えながら、同じ境遇を体験してきた先輩だからこそ言えるアドバイスも話してくださいました。「特にルーティン（毎日行うこと）の指導計画は細かく書き、第三者に評価してもらう。何故なら全体行事とは異なり、自分ですぐ改善ができるから」「率先して私が何々やってみますと発言してみる」そして、「何か気を付けたり、直したりすることはありますかと、上司・先輩に尋ね実行してみる」「『ヒヤリ・ハット』を軽減するため、どんな状況か（声援があるとき、気持ちが離れたときなど）、どんな場所か（出入口付近など）、誰が（心身障害児等）を常に念頭に置きながら保育する」など。とにかく2年目における心構えは「自分を出すこと」「積極的に聞くこと」が肝要であることを力説しておられました。最後に各人が自分に向けてのラブレター（褒め言葉）を客観的に書き、それをグループになった他人に読んでもらうことで、互いに分かり・認め・称え合いながら全員の拍手をもって終了しました。

午後の講義Ⅱは、「命のふれあいが育むもの～飼育活動のすすめ～」と題

し、常葉大学教授の山田辰美先生からお話をいただきました。「飼育に取り組む意義は『命あるものは子どもを優しくする』『飼育は子どもの人間性を育てる』にある」「子どもの豊かな人格形成には、テレビ、ビデオやゲームなどのバーチャルな『間接体験』ではなく、砂場遊び、草花遊びや飼育などの『直接体験』による①びっくり、②やったぜ、③なるほどの感動エネルギーが必要である」「自然体験（や生活体験）が豊富な子どもほど、道徳観・正義感が充実している」など、飼育も子ども達の健全な成長・発達に必要な実体験の遊びの一つであることを教えていただきました。

主任教員研修会

平成26年7月28日(月)静岡市のグランシップにおいて、主任教員研修会が開催されました。当日は主任教員を中心に、経験豊かな教員169名（理事長・園長含む）が受講しました。

講義Ⅰは、元慶應義塾大学医学部小児科医師　渡辺久子先生に「思春期の問題～0歳からみる心の育ち～」というテーマでご講義いただきました。

先生は41年間にわたり、医学の立場から問題を抱える多くの子どもと接して来られました。問題の起因は乳幼児期から始まり、深く傷ついていても周りの大人（特に親）に気づいて貰えず「良い子」で幼児期を過ごし、思春期になって様々な問題行動を起こしているそうです。先生は「心の土台の大切さ」を強調され、幼少時代の経験が乏しい大人は失敗から学ぶことができず親力が低いので、そんな大人を親に持った子どもは大変不幸であると話されました。様々な切り口で実例や専門用語を使いながら、幼児期の大切さを熱弁されました。

講義Ⅱは、東京大学大学院教授　秋田喜代美先生をお招きして「保育環境から保育を考える」というテーマでご講義いただきました。

始めに、①保育の質の向上として学びに向かう力を育てる②夢中になる挑戦的遊びの中での自己発揮③心（哲学）ある保育環境のデザインの3つの視点を示されました。具体的な内容については、幾つかの園の事例を写真などの映像を用いて説明されました。

後半は、4～5人のグループを作り各自が用意してきた写真について討議を行いました。

（活動1）夢中になっている子どもの写真を相互に紹介し合い、それらの写真を観合った後子どもが夢中になるために保育者に必要なことを3つ挙げ、隣のグループと発表し合う。

（活動2）環境の写真を観合いながら、何故いいなと思ったのかを話し合う。

経験を積まれた先生方が活発に意見を交わしていました。御二人の先生により乳幼児期の大切さ、幼児教育の素晴らしさを再確認することができた研修となりました。

おやこんぼ

おやこんぼ推進プロジェクト通信

親と子が触れ合う時間を積極的に作りましょう。

「おやこんぼ」は活動を通して、それぞれの家庭に親子の触れ合いの大切さを伝えていくものです。

「触れ合う」ということは子どもを育てるうえでとても大切な事です。今回はちょっと医学的な面を交えて説明します。

乳児期の抱っこは、子どもが人の温もりや抱かれた心地良さを皮膚感覚として感じ、自分が大切にされていることを体感します。それが自己及び他人への信頼感へ繋がり、大人になった時にもずっと自尊心を高くもって、他者との親密な関係を築いていく人になれると言われています。

13世紀にローマ帝国で恐ろしい実験が行われました。50人の赤ちゃんを乳母に何も語りかけない、抱いて可愛がらない育児をさせたのです。十分な栄養を与え、清潔に育てたにもかかわらず、1歳の誕生日を迎えることなく全員が死んでしまったそうです。スキンシップのないことのストレスによって成長ホルモンの分泌が止まってしまったのです。

また、触れられるとより多く分泌されるオキシトシンという体内物質も注目されています。この物質は人と人との親密な関係を築きあげ、自尊心や幸福感を高める効果があるのです。発達障害のある子どもに、母親がマッサージを繰り返してオキシトシンをたくさん分泌させてあげると、「言葉が出てきた」「集団行動に馴染んできた」などの変化がみられたそうです。

私たちの「触れ合う」というのは「遊ぶ」という意味で「触れる」ではないと思われる方もいると思いますが、人が楽しく一生懸命遊ぶ時には、触れることが含まれる場合が多いのです。手を添えてやり方を教えてあげたり、遊びながら手をつないだり、身体を触ってあげると子どもが喜ぶことは皆さんも日常の保育の中でご存知のはずです。

スキンシップが子どもに与える影響はお父さんとお母さんでは異なるとも言われます。多くのケースで言うと、お母さんのスキンシップは子どものお世話をする場合が多いため、子どもの情緒を安定させる効果があり、お父さんは子どもと遊ぶ時に触れる場合が多いので、子どもの社会性を伸ばす効果があると言われているのです。

これらのことを保育者である皆さんが知っている上で、保護者に触れ合うことの大切さを語るとより一層の重みが増してくると思います。親から子へと繋がれてきた子育ての知恵は核家族化によって断ち切られてきています。だからこそ、子ども達と日々関わりながら子ども達の成長を強く願う私たち幼稚園がその大切さを家庭に伝えていかなくてはいけません。皆さんにお伝えした事を理解したうえで難しい言葉ではなく優しく保護者に伝えてあげてください。それが私たちの役目でもあるのです。

親子でいっぱい触れ合うことが子ども達の成長の土台づくりであることを知り、子ども達と関われる保護者が増えることを期待しています。そのために静岡県私立幼稚園全体が「おやこんぼ」という言葉で合わせて活動をして広めて行きましょう。

教員養成校訪問

平成26年10月22日（水）に神奈川県小田原市にある小田原短期大学（昨年度までは小田原女子短期大学）を県私幼広報委員会関係者5名と広報委員の幼稚園で働く同校の卒業生1名の6名で訪問致しました。

当日は、あいにくの雨模様でしたが大学につくと窓口になってくださった保育学科講師の野津先生が玄関前で出迎えて下さり、授業が終るまでの時間に校内を案内してくださいました。その際、学長室では小沼学長に、保育学科長室では吉田保育学科長にもご挨拶をさせていただきました。

学生さん達との話し合いには、同学から保育学科准教授の宇佐美かおる先生、講師の野津直樹先生、助教の内山絵美子先生と静岡県出身の2年生6名・1年生3名の9名の学生が参加してくださいました。

同大学の保育学科は、定員が140人で学生の約半数が静岡県東部の出身で、そのほとんどが静岡県東部に就職しているそうです。

初めに、広報委員長から学生の皆さん全員に同大学の保育学科を選んだ理由と静岡県のどこの出身なのか。そして数ある養成校の中から小田原短期大学を選んだ理由を尋ねました。

すると、『幼児が好き』、オープンキャンパスで『少人数制で、きめ細かな指導をしてくれる』、『先生が優しくて些細な相談にも乗ってくれること』、『ピアノの個人レッスンが毎週あり指導が充実していることを知り、ピアノ初心者の自分でも大丈夫と聞いて志望した』と言う学生もいました。三島市・沼津市・裾野市・伊豆地域の出身者が多く、一部は下宿者もいますが、多くは片道1時間ほどかけて電車で通っているそうです。

次に、同行した同大学卒業生で県東部の私立幼稚園に勤務して2年目の先生に就職活動の様子と経過を話してもらいました。

『1年生の時には、保育園と幼稚園どちらにするか悩んでいたが、私立に就職したかったので就職資料室で自分が通える範囲の幼稚園保育園をすべて紙に書き出して、ホームページを見て情報を得ていました。2年生になって実際に就職した今の幼稚園で実習をして、この幼稚園に就職したいと思ったが静岡県の幼稚園はなかなか求人が少なくて11月の頭にパッと出ることもあったりするので就職できるかわからない状態でした。そこで、求人が出ている幼稚園から調べていきましたが、静岡県私立幼稚園振興協会のホームページに登録すると幼稚園の求人情報が入ってくるので、そこで情報を得ていました。希望の幼稚園から求人が出ていて受けることになりました』という貴重な話をしてくれて、学生の皆さんにはとても参考になったのではないでしょうか。

子育てフェア in 駿豆

『子育てフェアに参加して』

三島市にある5園の私立幼稚園が集まり、6月5日に未就園児を対象としたあそびのひろばを開催しました。静岡県総合健康センターの広々とした体育館で子ども達がのびのびと遊んでいる姿が印象的で、52組の親子が参加をしてくださいました。自由遊びの時間も多く設けられており、子ども達は自分のペースで、好きな遊びを見つけていました。保護者の方や保育者が近くにいることで、安心していたようでした。

子ども達を迎えてくれたのは、三島市のご当地キャラクター「みしまるおくんとみしまるこちゃん」。2人の登場に「おてを触りたいな・・・」「ママ、見て見て!!」と子ども達も大喜びでした。握手をしたり、体に触ったりして触れ合いを楽しむ姿が見られました。親しみやすいキャラクターを通して地域との繋がりが持てたこと、とても良い機会だと思いました。

おのりん先生による親子体操教室では、パワフルな先生にたくさんの元気をもらい、みんなが笑顔になりました。ボール遊びでは、ボールをかごに入れたり、動物の的に向かってボール投げに挑戦したりしました。まずは保護者の方が行うことで、子ども達も自然に真似をしていました。小さい子も「えい!」と夢中になってボールを投げて、思い切り体を動かしていました。中には「たくさんボールを入れたい!」と何個も何個も手に持っていた子もいて、楽しい気持ちが伝わってきました。触れ合い遊びでは、お父さん、お母さんに抱っこしてもらいゆりかごのように揺らしてもらう遊びもありました。子ども達のうれしそうな表情を見て、改めて乳幼児期の親子のスキンシップの大切さを実感しました。他にもビニール袋を使った遊びや手足を動かす運動遊びもあり、子どもも保護者の方も楽しめる内容でした。

他にも市内幼稚園のお母様が劇をやってくださったり、子育てなどの相談ができるスペースもありました。また三島市の私立幼稚園を知っていただくために、季節をテーマにした各園のポスターを掲示したり、パンフレットなども用意しました。私は梅雨をテーマに5歳児クラスの子ども達にかたつむりを作ってもらい、園の様子も知っていただけるように活動風景の写真も3枚程入れたポスターを作りました。

今回参加をし、いろいろな園の先生方、そして地域の子ども達にかかわることができ私自身大きな学びとなりました。子育てフェアでの学びをこれからに繋げていきたいと思います。

キャンディプロペラ楽しいね～！

親も子も手品に夢中！

子育てフェア in 遠州

『遠州地区子育てフェア』

私立幼稚園振興協会遠州地区（15ヵ園）の子育てフェアが、7月5日㈯、6日㈰に袋井市のエコパアリーナを会場に開催されました。

遠州地区は菊川・掛川・袋井・磐田・湖西の5市からなる地区です。いずれの市も公立幼稚園が多い為「私立幼稚園を良く知ってもらい、その存在や良さを伝えたい」と考え、2万人ほどの来場者の見込めるSBSテレビ静岡新聞社主催のイベント「こどもみらいプロジェクトinエコパ」に3年前より参加しています。

アリーナ内は巨大迷路や新聞プール、ピカピカ泥団子作り、パズル道場など子ども達が楽しめる企画満載です。遠州地区は2ブース分を確保し「こどもがまんなかプロジェクト」の垂れ幕と「遠州地区各園紹介」の大地図を掲げ、笹の七夕飾りやさまざまなディスプレイを施し来場者の目を引くようにしました。遠州地区私立幼稚園をアピールする為にパンフレットも作成しました。幼稚園の施設・保育時間・定員だけでなく、園行事や各園の特徴まで丁寧に掲載しました。これを私立幼稚園協会パンフレットとセットで配布しました。受け取った方は住んでいる地区の園の内容を「へぇ～、そうなんだ」と見比べていました。

ブース内では、15ヵ園が2日間、交代で出し物を工夫しました。七夕飾りを作って飾ったり、けん玉やブーメラン、でんでん太鼓を作って遊んだり、大型絵本やエプロンシアター、マジックショーを見て楽しみました。いずれも子ども達には大人気、さすがは普段から楽しい保育を展開している私立幼稚園の先生方です。子ども達の心をつかむプロだと実感しました。

「入園するのはどうすれば良いの？」「公立幼稚園とは何が違うの？」等の質問も出てきました。ブース内に設けた「子育て相談」コーナーは、日頃の悩みを語る母親の姿も見られ、開催した成果を実感しました。私立幼稚園の存在を大いにPRできたと自負します。そして一つひとつの催しを開催するのにいつでも15ヵ園が一丸となれる遠州地区を誇りに感じています。

でんでんだいこの部品ちょうだい～

七夕に願いを

特集

親と子の心を育てる幼児教育 3

意欲を引き出す2つの条件【その1】

島根大学理事・副学長
肥後功一

リハビリテーション病院や国立特殊教育総合研究所に勤務の後、島根大学教育学部講師、助教授、心理・発達臨床講座教授を経て現職

専門分野 / 教育臨床心理学・発達臨床心理学
研究テーマ / 教育（保育）におけるコミュニケーションとその障害，心理臨床相談・教育相談・発達相談の理論と方法，家庭における子どもの育ちと“ことば”の問題

大学・大学院での主な担当授業科目 /
教育臨床心理学概説、障がい児者臨床心理学特論、臨床心理査定演習など

所属学会 / 日本心理臨床学会・日本発達心理学会・日本特殊教育学会

1 意欲―外界に向かおうとするエネルギー

グローバル化が進み、決まりきった正解が通用しない変化の激しい時代、未知の問題に意欲的に挑戦し、人々と協力しながら自分らしく思考し、現実の問題への実践的な解決を提案できる「21世紀型能力」を身につけてほしい…子どもの成長へのそうした期待の中、その大切な土台を与える質の高い幼児教育にも関心が集まっています。幼児期に本当に伸ばすべき自発性・主体性…それは、大人の用意した課題やプログラムの枠内で発揮される積極性ではなく、大人の目から見れば何でもない日常の風景の中に、その子どもらしい興味に導かれながら目を輝かせる対象を発見し、自分のしたいこと（目標）を見つけ無心に取組み、想像をめぐらせながら試行錯誤（思考、工夫）し、おもしろさや困難を友だちと共有する…そんなふうに自らの日々を充実させていく力（生きる力）のことです。

このような意欲的な姿はどんなふうに育つのでしょう。幼児期に限らず、小学校以降、大人になってからも、勉強（学習）、スポーツ、楽器、趣味などなど、新たに何かと出会って大きく変わる（これまでみられなかったほどの意欲が引き出される）というのは、むしろ普通の経験ですので、意欲というものは、どんな人にも備わっていて、機会さえ廻ってくればいつでも出てくるものだと楽観することもできます。しかし一方、いやいや、好きなことや楽しいものに向かって発揮される意欲など当たり前、苦しいことや不得意なものに対して頑張れる、そんな骨太で持続性のある意欲こそ大切だ…そういう厳しい意見もあるでしょう。多くの事例を経験する中から、私は意欲の問題―つまり外界に「向かおうとするエネルギー」がどのように引き出され育っていくのか―を考えるためには、次の2つの条件が重要ではないかと考えるようになりました。

❷ 意欲は「欲」から

「意欲とは「意」すなわち意志によってコントロールされた「欲」のことです。意志とは、端的に言えば「ことば」のことですから、意欲というのはすぐれて人間的な「ことば」というものによってコントロールされた動物的なエネルギー(つまり「欲」)のことなのです。したがって「意欲的」であるためには、なによりもまず動物としての欲の部分、つまり動物らしく外界に向かおうとする欲求（エネルギー）をしっかりと引き出しておくことが重要です。これは幼児期というよりも、生まれて直後からの乳児期（0～2才）に重要な課題でしょう。もちろん乳児期の外界に向かおうとするエネルギー（さまざまな運動や表出）には個人差も大きく、同じ親から生まれたきょうだいでもかなり違っているものです。しかしだからこそ「引き出す」ということ、つまり子どもの個性に応じた環境側からの働きかけが非常に重要な部分でもあるのです。

　では乳児期から幼児期にかけての一番基本的な「動物としての欲」とは何でしょう?それは言うまでもなく「食欲(食物・食事への欲求)」です。これが動物としてのもっとも基本的な「外界へ向かうエネルギー」であり、これによって生命維持の根幹が支えられている以上、動物とは「そのために動く物」のことだと言っても過言ではありません。ですから「乳幼児期に親が子どもに教えなければならないことを1つだけあげなさい」と言われたら、私は迷わず「食べること」と答えるでしょう。もちろん人間にとって「食べること」は動物のそれとは違って、より社会的・文化的な営みへと変化していく複雑な行動ですが、それにしてもやはりスタートは動物としての欲、つまり生きるために食物に真っ直ぐに向かっていく力を育てておくことが重要なのです。

　心の問題を抱えるとき、食欲不振など（ひどい場合には拒食や過食などの摂食障害のような）食の病理が現れやすいことはよく知られています。将来、さまざまに思い悩む日があっても、とりあえず「しっかりと食べること」が揺らがない子どもは安心です。動物としての健康な欲を十二分に引き出し、食べることが何より楽しみという気持ちを育てる中で、「いつ、どこで、何を、どのように、食べるべきなのか」をきちんと教えることが親の責任の第一だと私は思います。家族みんなで食卓を囲み、食に向かう気持ちを共有する中で育った子どもは、食事という「団らん」の場が、食べ物の栄養だけでなく心の栄養補給の場であることを、理屈ではなく身体で理解するようになります。贅沢な食べ物に溢れている今日、私たちは毎日の食事の意味を栄養やカロリーの面からだけ考えてしまいがちですが、日に数回繰り返される食の場面は、動物としての健康な「欲」を引き出し人間的な「意欲」へと育んでいく最も大切な場なのです。

　子どもの意欲（外界に向かうエネルギー）を引き出す、もう1つの重要な条件は、簡単に言えば「心の安定（安心感）」が確保されていること」ですが、これについては次回のお話にいたしましょう。

幼稚園教諭になって

北浜幼保園　鈴木 麻優佳

幼い頃からの夢だった幼稚園教諭になり、約4カ月が経ちました。あっという間でしたが、1日1日が学びの場でとても充実した4カ月となりました。ずっと憧れだった幼稚園教諭として、子どもたちを迎えることにわくわくする気持ちとともに「自分が先生という立場で子どもたちに指導していけるのかな」という不安もありました。

3月に行われた園の研修に参加させていただいた際に「自分が担任になった子にとって、先生はその子が何歳になっても先生なんだよ」という言葉がとても印象に残りました。私自身、幼稚園で教わっていた先生方は「大好きな先生」としてたくさんの思い出が今でも私の中にあることを思い出しました。そして、子どもたちにとって私も「大好きな僕の先生、私の先生」でいたいと思いました。

私は年少クラスの2人担任の1人として子ども達と共に過ごしてきました。初日は子ども達が登園した保育室の中は泣き声ばかり。何もわからないでいる子ども達が「先生」と私のことを頼ってくれること、保護者の方に「先生」と声を掛けてくださることが嬉しく、同時に先生としての責任を改めて感じました。

泣いてばかりの子どもたちでしたが、毎日過ごしていくうちに幼稚園生活にも慣れ、笑顔が増えてきました。保育者から離れることができなかった子どもが友だちに誘われて園庭で一緒に走り回って遊んでいたり、1人でトイレに行くことができなかった子どもが「先生！おしっこ出た！」と笑顔で報告してくれたり、日々成長していく子ども達に私も嬉しく思いました。振り返ってみると、年少の先生として頼られる存在となり始めているのかなと思う反面、活動をこなすことばかりに気をとられ、子ども達の気持ちや思いを考えて保育することができていたかなと反省する部分もたくさんありました。同じクラスを担任している先生をはじめ、たくさんの先輩先生方が指導、そして支えてくださるおかげで自分が保育できていると思います。子ども達の成長に負けないよう、私も子ども達の「大好きな先生」としてたくさん成長していきたいと思います。

憧れの幼稚園の先生になって

御殿場聖マリア幼稚園　佐藤 愛

「幼稚園の先生になりたい」というのが物心ついた頃からの私の夢でした。その夢は10年来変わることなく、現在、私は幼稚園教諭として母園である御殿場聖マリア幼稚園に勤務しています。気が付けばあっという間に半年が過ぎました。4月当初は、憧れの幼稚園の先生になれたことに喜びを感じながらも、いざ大勢の子ども達を目の前にすると緊張の方が勝り、固い表情になってしまうこともしばしばありました。その後、慣れ始めてからも子ども達とのかかわり方や活動の進め方など様々な課題に直面しましたが「めぐみ先生！」と声をかけてくれる明るく元気な子ども達の姿や先輩の先生方に支えられ、充実した毎日を過ごしてきました。

先日、風邪気味で園に来たことがありました。すると翌日、ひとりの子どもがそっと私に手紙をくれました。そこには似顔絵と早く治るように…という言葉が記されていて、家に帰った後も私のことを気にしてくれていたのだなと心が温まりました。同時に子ども達にとってはたとえ何年目の先生であっても「先生」であることに変わりがないということを実感しました。

現在、私は日常生活を共にする縦割りクラスでは「すみれ組」の補佐を、横割り活動の際には年中児を担当しています。すみれ組では年長や年中の子が年少のお世話をしていたり、年少の子がお兄さん・お姉さんの真似をしている様子などが度々見られ、その光景はとても微笑ましいものです。また、横割り活動では運動会などの行事にちなんだ製作を通して子ども達の表現力の成長を感じ、大事にしていきたいと感じました。「おはようございます！」「さようなら！」大好きな子ども達と交わす沢山の挨拶に、私は幸せな気持ちでいっぱいです。半年という期間ではありますが、子ども達が日々の生活の中で確実に成長していくことを実感し、その過程を間近で見守っていけることに先生という職業の魅力を改めて感じました。

子どもにとっては「先生」でも、まだまだ私の幼稚園教諭としての道は始まったばかりです。今後も課題はますます増えていくと思いますが、子ども達と一緒に悩んだり笑ったりしながら、一人前の「先生」になれるよう努めたいと思います。

子ども達のために

富士宮北幼稚園　望野 亜里砂

「ねえお母さん、逆上がりもっとやっていたい」男の子は何度も逆上がりをして幼稚園を後にしました。昨年度担当した年長男児が、卒園式終了後、園庭に残り鉄棒から離れなかった様子です。最初は苦手と思っていた逆上がりを「もっとやりたい」と言えるようになり卒園していく姿は逞しく、園としても喜びとなりました。

小学校に行っても鉄棒をする姿が想像できました。そして幼児教育の重要性、責任を感じ、自分の保育を再確認する大事な場面となりました。

子どもを取り巻く環境は、少子化・核家族化が進み、地域における集団の中での体験をすることが難しくなりつつあります。また親子関係の構築にも問題があり、それらを考慮しながらの総合的な指導を、幼稚園及び教師に求められていると感じます。

幼稚園教諭となり18年。たくさんの方々に支えられ、ここまで保育をさせていただき感謝しています。反省と実践を繰り返し、私の保育の姿勢も変化してきました。中堅時代は「何歳児だから出来るだろう」「出来るようになってほしい」と先入観や理想が強く、教師主導の一方的な保育をし、活動に連続性を持てていませんでした。

アドバイスをいただいたり研修を積み重ねながら、それまでの保育を見直しました。「主体的な遊びから、子ども達は多様な発達をする」ことを踏まえ、子どもの実態を捉えながら主体性を発揮できるような計画を立てるようにしました。子ども達は何に意欲的に取り組んでいるのか、何に行き詰っているのかを理解し、時には保護者から情報を得ながら試行錯誤していきました。「やり方が分かって楽しい」「教えてくれてありがとう」と子ども達からの言葉は励みになり、子ども主体の保育は必要だったと確信し、今も心掛けています。

子ども達が生きていく力を培えるような幼児教育を実践することを心掛け、本園をいきいきと卒園していけるよう、これからも研究・研修を重ねていきたいと思っています。

保育は楽しく、おもしろく！

平島幼稚園　阿形 佳苗

今年度の担当は4歳児。5月、大きくなったお祝いでもらった畑。嬉しくて畝作りまで一気に終え、植えたのはみんなで決めたスイカとトウモロコシ。数日後、1本のスイカの葉が枯れてきてしまいました。「分かった！水を沢山かけたからだよ。おばあちゃんがあまりかけちゃいけないって言ってた」とAちゃん。「屋根をつければ？」とBちゃん。その後もぬれない方法を考えていましたが、Cちゃんが突然「鬼がさ、スイカとトウモロコシの葉っぱチョキってやっちゃった」とポツリ。「え！」と子ども達。私もびっくり。「鬼がドカーンと来て絵の具でぬったんじゃない？茶色で」「お休みの間に来ちゃった。豆でバコバコってやる！」とAちゃん。「チクチク（ヒイラギ）くっつければいい」とDちゃん。枯れてしまった理由を自分の経験を元にして仲間と考え合う姿に感心しながらも、この話しはどうなっていくのだろうと私もドキドキハラハラ。結局、畑に鬼が来ないようにと大豆、ヒイラギ、野菜（キャベツ）を蒔き、それから数週間…。枯れた葉は元には戻らず鬼ではなかったと納得した様子の子ども達は、時々水を撒き、大きくなるのを待ちました。（その後、夏には無事にスイカができ大喜びで食べました！）

保育者になって早いもので13年。それでもまだまだ自問自答する毎日でその度、会議で話をし、掃除しながら相談していく中で、子どもの思いや気持ちを大切にして、一緒に考え一緒に方向を創る保育を目指してきました。とは言っても日々ジェットコースターに乗っているような毎日。いいかなと思えば急降下。けれど子どもの豊かな発想力にワクワクしてまたゆっくり上っていく。その繰り返し。正直、子どもの心についていくのが精一杯という時もあります。でも子どもの世界に少し寄り添ってみると、スイカの話のように驚きの展開になったりして、やっぱり面白いのです。現実と空想の世界が同一に存在すると言われる4歳児ならではの世界観ですが、その世界にお邪魔させてもらえるのは保育者の特権！大人になってしまった私の発想ではどう考えても出てこない世界を体験させてもらっているんだなと感じています。忙しく過ぎていく毎日、保育は子どもも保育者も『楽しく、おもしろく』が大切ということ！今後も楽しい保育を子どもと一緒に探し、体験していけたらステキだなと思っています。

『はじめてのおつかい』より

筒井頼子（つついよりこ）の世界

子どもが人生に出会う本

筒井頼子さんがつむぐ世界は、
子どもたちが「これは私のことだ」と
思わずにはいられない「何か」があるようです。

――私はね、子どもたちを見ていて、あっこれは私の体験と同じだな、これは私も感じたことのある感覚だ、というものに出会った時に、その子がすごくわかる、という気がするんですね。（「こどものとも」折込ふろく1986年4月号より）

絵本作家の長谷川摂子さんは、筒井頼子さんの絵本の世界を、次のように評していらっしゃいます。「子どもが、一人の人間として、この世に生をうけて、いろんなことに出会ってゆく。驚きとか不安とか、期待とか、そういうものの中で、心が揺れていく……そういう子どもの心を、すっと透明な目ですくって描いている……。筒井さんの絵本は、子どもが人生に出会う本っていう感じがする。」

絵本を読むことで、子どもだからこそ感じる気持ちを、大人になった私たちは思い出し、子どもたちは自分に重ねあわせて、本の世界に入っていくことができる……。ぜひ、筒井頼子さんの絵本を子どもたちと一緒に読んでください。

Illustrations © Akiko Hayashi

そうちゃんとお父さんのボタンの掛け違いからはじまったものがたり。

新刊情報

そうちゃんはおこってるんだもん
筒井頼子 文／渡辺洋二 絵
定価（本体1300円＋税）
4才から

そうちゃんが一人で遊んでいると、隣の部屋で妹のなっちゃんがお父さんのお馬にのって遊んでいました。そうちゃんもお馬にのりたかったのに、なかなか順番がまわってきません。「もういいもん」そうちゃんは、テーブルの下にもぐりこんでしまい、お父さんとなっちゃんが呼んでもでてきません。おこって、へそを曲げて、やがて機嫌を直して仲直りするまでの男の子の気持ちの変化を丁寧に描きます。

姉妹編紹介
こいぬをむかえに
筒井頼子 文／渡辺洋二 絵
定価（本体1,200円＋税）
5・6才から

筒井頼子の作品紹介

はじめてのおつかい
筒井頼子 作／林 明子 絵
子どもがいつか必ず経験する、はじめてのおつかい。ひとりのおかあさんが、子どもの体験をもとにつくったお話を、さわやかな絵本にしあげました。
定価（本体800円＋税）
3才から

いもうとのにゅういん
筒井頼子 作／林 明子 絵
突然、妹が盲腸の手術で入院することになりました。ひとり残されたあさえの気持と、妹へのほのぼのとした愛情をみごとに描いた物語です。
定価（本体800円＋税）
3才から

とん ことり
筒井頼子 作／林 明子 絵
山の見える町に引っ越してきたばかりのかなえと、新しい友だちとの出会いが、かなえに宛てられた不思議な"郵便"の謎を通して、感動的に描かれます。
定価（本体800円＋税） 4才から

あさえとちいさいいもうと
筒井頼子 作／林 明子 絵
おかあさんがおつかいの間、あさえは妹のおもりです。2人で道路に絵を描いて遊んでいましたが……。幼いお姉さんの緊張ととまどいを描きあげた作品。
定価（本体800円＋税） 3才から

おでかけのまえに
筒井頼子 作／林 明子 絵
ピクニックにでかける前の、小さい女の子のはずむ心を、ごくあたりまえの家庭を舞台に描きだした、ほのぼのとのびやかな絵本です。
定価（本体800円＋税） 2才から

おいていかないで
筒井頼子 作／林 明子 絵
お兄ちゃんと一緒に遊びたいあやこ。でもお兄ちゃんはあやこをおいていこうとあの手この手。「わたしもいく！　おいていかないで！」あやこの声が響きます。
定価（本体800円＋税） 2才から

福音館書店
〒113-8686 東京都文京区本駒込6-6-3
http://www.fukuinkan.co.jp/
駿河こどものとも社
浜松こどものとも社

親子で育つ幼稚園

鈴川幼稚園
PTA会長　志太 有美

私は、中学生・小学生・幼稚園児の三人のかわいい娘の母親です。

今、年長組の末娘が通うこの鈴川幼稚園は私自身も通った、とても思い入れの深い大切な幼稚園です。親子でお世話になっている鈴川幼稚園は、60年以上の長い歴史があります。北には富士山、南には駿河湾、園庭には樹木が茂み、四季折々の花が咲き、野菜が育つ。そんな自然に見守られながら子ども達は元気に過ごしています。ここで幼稚園のオススメを三つ紹介します。

一つ目は、昔から変わらない白襟のついた黄色の園服にベレー帽。みんなで並んで歩く姿はとてもかわいくて、地域の人気者！

二つ目は、すべて砂の園庭。子ども達は毎日、この砂の上を駆け回り靴の中にたくさんのお土産を持ち帰っています。この砂の上で、運動会はもちろんのこと、土俵を作ってお相撲大会も開催されます。

三つ目は、30年以上前からある給食。一人の先生が、全園児のために愛情込めて作ってくれています。家では食べない野菜も園の給食では大好き！美味しい！とパクパク食べる姿は親として本当に嬉しく、「食」について考えさせられることもたくさんあります。

親子二代にわたる幼稚園生活も今年で最後となりました。そんな中、今年は17年に一度まわってくる「富士地区私立幼稚園PTA連合会」の会長という大役を引き受けさせていただき、2月に行う子育て支援事業の催しを企画しています。「この私には無理！」「この私で良いのか？」と不安でたまらなかった年度初めでしたが、他16園の力ある会長たちに支えられ、楽しく企画を進めています。忙しさの中にも、皆さんから学ぶことがたくさんあり、とても充実した日々を送らせていただいております。幼稚園を通して自分自身が学び、成長できる環境にいられることに感謝し、企画する催しが子ども達に楽しい思い出として残るよう頑張っています。

父母の会活動に関わって

富士見幼稚園
父母の会会長　中村 憲子

「優しい子に育つよ」幼稚園選び真っ最中だった私に、仲良くして頂いている富士見幼稚園の先輩ママさんがかけて下さった言葉です。その際に未就園児向けに行われている「おひさまルーム」をご紹介下さり、初めて園の門をくぐりました。そこで先生方や園児達と触れ合い、温かな雰囲気に包まれた園のファンになった私は、息子を富士見幼稚園に通わせて頂く事が夢になりました。幸せなことに夢が叶い、長男に続き今は次男がお世話になっています。長男は小学3年生。親バカではありますが、弟思いの優しいお兄ちゃんに育ってくれています。これも先生方やお友達が愛情一杯で包んで下さったお蔭と感謝しています。

そんな大好きな園のお役にたてるなら、と引き受けた役員でしたが、経験した事の無い程のプレッシャーに押し潰されそうになりました。そんな私を、前役員の皆様・役員の仲間達が全力で支えてくれ、一人悩み抱えていた重圧を皆が一緒に背負ってくれました。素晴らしい仲間に巡り会えたことを心から幸せに思います。

毎年7月に父母の会一大イベント「ミミーちゃんバザー」が行われます。このバザーは保護者一丸となって取り組むイベントです。バザーでは毎年手作りおもちゃの販売を行っており、新聞紙を固く締めながら巻いて棒状にして飾り付けて、剣やステッキにして販売しています。新聞巻はコツがいり、前役員さんから巻き方を習い引き継ぐのが伝統になっています。飾りは皆でアイデアを出し合い、今年は女の子向けにバトンを作りました。皆とても喜んでくれ、嬉しかったです。当日は、ゲーム・クラフト・各種販売・読み聞かせ、全てのコーナーで保護者の皆様がアイデアたっぷり・愛情たっぷりで対応して下さり、本当に忘れられないステキなバザーになりました。

バザーが終わり、毎日一緒にいた仲間と会う間隔が少しあき、寂しく思う日々です。

これからも皆仲良く「輪」を大切に、富士見幼稚園らしく「和」やかに、一生懸命父母の会活動をしていきたいと思っています。

街ぶらり 伊豆韮山天城沿線ぶらり

第8回「街ぶらり」は、東名沼津インターから修善寺まで開通した東駿河湾環状道路と伊豆縦貫道沿線のおすすめスポットを紹介します。

◆江川邸（重要文化財）、韮山役所跡（史跡）

江戸幕府旗本として栄えた江川氏住居である江川邸、枡形表門越しに大きな青銅製屋根がそびえ、主屋玄関がその下に臨まれます。大河ドラマ「篤姫」の舞台にもなったここ江川邸ですが、内部は50坪の大三和土（たたき）（土間）が広がり、欅の生き柱や竈（へっつい）、36代当主英龍が手掛けた国防に関する史料を見ることができます。小屋組架構最上部には日蓮上人自筆の曼陀羅が棟札として祀られており、そのご利益により700年以上も火事に遭わずに保たれているとのことです。

◆韮山反射炉（国指定史跡）

幕末伊豆下田へのペリー来航を契機に日本は本格的に欧米列強に対する国防強化に踏み切り、江川英龍は鉄製砲鋳造のための反射炉築造を手掛けました。その完成には長い年月を要し、息子の英敏の代までかかりました。反射炉は石炭等の燃料を燃やしその炎と熱をドーム型の炉天井で反射させ一点に集中させることで高温を発生させる構造で、日本製鉄業の黎明期を象徴する史料として来年世界遺産登録に向けての手続きが進行中です。

◆浄蓮の滝

石川さゆりさんの名曲「天城越え」の歌詞にも登場する〔じょ～れんっのたっきー（浄蓮の滝）〕。高さ25m、幅7m、滝つぼの深さは15mの大きな滝はマイナスイオンたっぷりの癒しの場所でした。滝のそばには「天城越え」歌碑や静岡県指定の天然記念物「ハイコモチシダ」の紹介があり、撮影ポイントや見どころもたくさんありました。川の横には一面に敷き詰められた緑のわさび沢もあり、その上にはわさび漬け、茎のしょうゆ漬けや三杯酢漬けなど試食しながら選べるお店もありました。

◆伊豆・三津シーパラダイス

今回のお勧めは室内よりも屋外。青空の下のショースタジアムでは、アシカ・トド・イルカがそれぞれの特徴を生かした楽しいショーを繰り広げます。中でも男女2人のトレーナーとアシカによるパフォーマンスは、まるでヒトとアシカの息がピッタリあったシンクロナイズドスイミングを見ているかのようでした。ショーステージのイルカショーは富士山をバックにトレーナーと一緒に大きなジャンプ等ダイナミックな演出となっていました。ここに来るなら、必ず天候とショーの時間を事前にチェックして行くことをお勧めします。

私たちの出掛けた日は、晴れて駿河の海とすぐ近くの淡島、また遠くの富士山が一望できる最高のロケーションでした。

みなさんのおすすめの場所やお店があったら広報委員までお知らせください

健康随想

4

心の健康を考える

物事は表裏一体

-- 子ども時代の自分に出会う --

子育て支援カウンセラー
（臨床心理士）
山本 奈苗

このたび『健康』について私自身の考えた事を寄稿させて頂く機会を得ました。幼稚園の先生方に読んで頂けるという事で、私の自己紹介も含め、つれづれなるままに思うところを書き綴ってみようと思います。

思い返してみますと、私の幼稚園時代は「不安でいっぱい」「先生に話しかけられても答えられない子」「走るのは遅いけど鉄棒・うんてい・縄跳びは得意な子」であったと思います。シール帳の連絡欄に『話しかけても答えがなかなか返って来ない』という様な事を先生が書かれたことがあり、随分心配したと、大きくなってから母から笑い話で聞かされた覚えがあります。無口で大人しく、なかなか自分の事を表現できないタイプだったと思います。しかし私の記憶には、好きな活動もあったり、先生に話しかけてもらえるのはすごく嬉しくて、先生の事が大好きだったなあという記憶もあります。

引っ込み思案で内向的な性格はその後も悩みの種となり、人とつきあっていく中で自分はどうあったら居心地が良いのか、ずいぶん大きくなるまで悩みました。けれどもその悩みのお陰で、心理学という学問に出会い、良い友人や先生ともめぐり合い、こうして無事、なんとか援助する側の人になれた…というのが私の大雑把な軌跡でしょうか。

悩みの深かった10代20代前半頃の事を思いますと、援助する側になるか援助される側になるかは紙一重であった…というようなところもあった気がします。

亡くなられた心理学会の大御所、河合隼雄先生がおっしゃっていた「物事は常に表裏一体」というのもうなづける気がします。物事は良い面ばかりでもなく、悪い面ばかりでもない。よく例えに出されるのは、自動車の開発です。自動車が世の中に普及して生活はとても便利になったけれど、その反面、交通事故などの悲劇も起こるようになってしまった。私自身で言えば、引っ込み思案という悩みの種であったものが、私自身を救う事のみならず、人を助ける事にもつながる学問に導いてくれた。人生を作り上げる原動力になってくれた、という感じでしょうか。

子ども達や保護者の方々と接するとき、私はこのことをよく心がけています。一見良く思われないような表れや出来事の中にも、良い面が必ずひそんでいると。そして医療の世界に比較的長く従事していましたので、ついついネガティブなチェックをしてしまいがちな自分を戒め、出来ている事、健康的に適応的に働いているポジティブな面を積極的に評価するよう心がけています。

子育てをする機会に恵まれた女性は、育児をしながらもう一度、子ども時代の自分に出会うのではないかと思います。自分の育てられ体験、現在の両親の姿、自分の育児はどうあれば将来子どもが幸せになれるか…過去、現在、未来に行き来して悩みながら、自分が小さい時に残してきた親への思いや、取りこぼしてきた発達過程にもう一度出会い、気づき、成長するチャンスをもらっているような気がします。

子育て支援カウンセラーになって、幼稚園で仕事ができるという機会に恵まれて、私自身ももう一度、幼稚園時代の自分に出会っているような気がします。当時は楽しくも不安の方がいっぱい…な日々でしたが（大人になっても幼稚園や学校はなぜかちょっとドキドキしてしまうのですが）、今なら、そんな自分も可愛かったと思えるし「そのままでいいよ」と声をかけてあげられそうです。若い先生方の中には、もしかしたら、幼稚園に入園してくる子ども達に出会いながら、ご自分自身の幼稚園時代にももう一度、出会っているという方がいらっしゃるかもしれませんね。ご自分の体験は、目の前の子ども達の表れに共感したり理解を深める貴重な手掛かりになるはずだと思います。

「マインドフルに、心を使って子どもと出会ってくれる大人が少なくなったかなー」と感じる事があります。行政や学校の先生や親でさえも…。子ども達が人ではなくモノ化する現象にしばしば出会います。子どもの姿をそのまま受け止める、困っている事や苦労や痛みを一緒に抱える、どうしたらより良いか悩みながら希望を持って共に歩む…言うは易し行うは難しです。けれどそういう支援者でありたいと思っています。

静私幼だより
NO.172
2014.12.15

ナイスショット

騎馬戦!!お父さんの肩車 嬉しいな～

大きなさといもくん

あめをペロニャー

みんなの満面な笑顔がとても印象的でした！

ぶら～んぶら～ん

おにいちゃん、おねえちゃんと仲良し電車!!

人参のにおいがするよ

こんなにたくさんとれました！

わーい！　おそうめんもなかよしだー！

はっぱのダンス

【編集後記】　国連の発表する「世界幸福度指数」、日本は昨年43位でした。経済発展と国民の幸福度がリンクしていない現実を、この数字で毎年思い知らされます。平成26年も残りわずか。今年の日本人はどれだけ幸せだったでしょうか。心身に無理を強いなければ生きていけない現代の日本で、これからの時代を生き抜いて行く子ども達を思うと、わが身を差し置いて心配でなりません。子ども達が大人になる頃の社会に、私たちはどう責任持つか、深く考えさせられます。一億総ストレス社会と言われますが、社会は人の集まりです。ストレスは人と人との関係性の中に生まれます。お互いが我儘にならず、不快を許し、気配りのできる美しい社会を作る為、人生の根幹である幼児教育を綺麗ごと無しで見つめ直す事が、本当に子ども達の為ではないでしょうか。

広報委員　すすき幼稚園　青山丈碩

（表紙写真／しょうえい幼稚園）

発行人／相田　芳久
編集人／座光寺　明
広報委員会

発行所／静岡県私立幼稚園振興協会
〒420-0853
静岡市葵区追手町9番26号
静岡県私学会館内
TEL.054(254)6820・FAX.(255)3694

http://www.shizushiyou.or.jp/
E mail: office@shizushiyou.or.jp

印刷／(株)三創　レイアウト・イラスト／村松麗子

このQRコードを携帯電話の「QRコードリーダー」で読み込めば、協会HPの携帯サイトにそのままアクセスできます。